

伝統継承・女性自立

ー チボリのティナラクからピラーンのナバルタビへ 今年のイベント出展 ー

P1でご報告のグローバルフェスタと、10月8、9日に参加したよこはま国際フェスタの両イベントでは、手ごろな価格でリピーターの多いカードケースや小物入れ等の現地縫製ティナラク織製品をブース前面に並べるとともに、会員の安井さん縫製のポシェットやトートバッグ等のナバルタビ織製品を、テント壁面に数多く掲げてみました。

今回更新した女性自立事業のパネル(右の写真)でも、ナバルタビ織の技術継承や販路拡大にシフトするという方針に触れました。

しかし、二つの伝統織は、感触、見た目ともに互いによく似ていて、お客様からはその違い、見分け方を質問されます。

原材料は全く同じで、製法も、前90号でお知らせのように、タカラ貝で擦ってなめらかにする最後の工程に違いがある程度です。ティナラク織はしっかり擦るため光沢があります。

さらにその違いをいうならばやはりデザインです。特に熟練織手グサベンさんのものを初めて手にした時は、その繊細な模様に驚きました。どちらかというとき大きめではっきりした柄が多いティナラク織との違いがよくわかりました。



ただし、89号の本欄でお伝えのように、ここ数年、私たちがナバルタビとして扱うアムグオ地区の織は、ピラーン人と結婚したレイクセブ出身のチボリ女性、ソーニャさん(故人)とアナベルさんのものが中心で、ティナラク風ナバルタビ織という感じになっていて、両者の区別は一層分りにくくなっています。

アムグオには10名近いナバルタビ織経験者がいるといわれていますが、材料が買えない、組織化されていないため販路もなく、収入源になっていません。今回のナバルタビ振興事業への期待が高まっていますが、ようやく「織の家」修理が終わった段階です。諸事情で遅れている活動、次回は写真報告をお届けできたらと思います。

チボリ&レイクセブ・ピースサミットに参加 ーCOWHEDの近況からー

レイクセブでは8月18日に「チボリ及びレイクセブ・ピース・サミット」が開催され、チボリ民族文化の拠点の一つと評価されているCOWHEDも招かれて、ジェナリンさん(写真下・左端)はじめ20名あまりが参加しました。

レイクセブ町は、半世紀余り前のサンタクルスミッション(SCM)の活動に始まり、教育普及という点だけでなく、希少な熱帯林、チボリの民族文化、風光明媚なセブ湖という観光資源にも恵まれて、先住民族が多い町としては、現金収入の機会が多く発展していると考えられていますが、ゲリラ兵士募集ターゲットであるという点では、例外ではないようです。

平和を考えるこのサミットでは、共産ゲリラNPAやイスラム過激派によるゲリラ兵士募集に対して、衣食の保証が魅力で、応募する若者が後を絶たない。しかも、その9割は先住民族で、レイクセブのチボリも例外ではない。ミンダナオの平和構築のため、ゲリラ募集に応じないようにという話があり、改めて、ミンダナオや国家の中でのチボリ民族の立場に気付かされたそうです。(写真はCOWHEDのFacebookから、報告は元マネージャー・ジェマさん)

伝統を守る・伝統を生かす



伝統織の素材

アバカ(糸芭蕉)の木。
バナナ(実芭蕉)に似ている。

鮮やかな柄・デザインが
多いティナラク織。
光沢がある。



チボリ民族のティナラク織と、ピラーン民族のナバルタビ織は、アバカを素材とし、キナルムの葉とロコの根で、それぞれ黒、赤に染めて、手織りする点で似ているが、タカラ貝で擦る最後の工程の有無により、ティナラク織の方が光沢がある。

やや繊細な感じの
柄・デザイン
のナバルタビ織。



支援対象のシフト

自立達成90%のレイクセブ町チボリ女性組合(COWHED) →
組織化から始めるアムグオ村のピラーン民族ナバルタビ織振興



チボリ文化振興を掲げる町の支援で、縫製研修実施中のチボリ女性組合COWHED。ターゲットはセブ湖畔リゾート客やマニラ他の国内市場。



5年前、ピラーンの村アムグオで結成のナバルタビグループは、中堅織手ソーニャ(写真)を昨夏失い、潜在織手発掘が継承者育成が急務。

←2010年61号でもご紹介したグサベンさん

